

—資料—

平成以降の中学国語教科書における俳句教材について(2)

入 江 昌 明

一 はじめに

小稿は、中学校の国語教科書における俳句教材を考察するために基礎資料として作成した「平成以降の中学国語教科書における俳句教材について(1)」の続編である。前稿では平成以降に刊行された(含 刊行予定)の五社の国語教科書のうち、学校図書と教育出版の国語教科書に収載された俳句関連の教材を取り上げたので、本稿では残る三社、すなわち東京書籍、光村図書、三省堂の国語教科書に収載された俳句関連の教材を出版社別、年代順に取り上げた。

二 東京書籍、光村図書、三省堂の国語教科書に収載された俳句教材

三社の国語教科書に収載された俳句関連の教材は、各教科書会社の傾向を把握するために出版社別に平成十八年度版から平成二年度版まで順次溯る形で掲出した。教科書は東京書籍、光村図書、三省堂の順とし、取り上げる内容その他については以下の要領に従った。

※ 作者名や俳句中の漢字、歴史的仮名遣い等に施されたルビは、煩を避けて省略に従った。

※ 出版社によっては前句付けや連句を収載するが、いずれも俳句と

関連が深いので俳句教材として取り上げた。

※ 出版社によっては川柳を収載するが、川柳も同じ詩型ということ
で俳句教材として取り上げた。

※ 俳句の創作に欠かせない歳時記などについて言及したのも俳句
教材として取り上げた。

※ どの出版社も古文の教材として収載する『おくのほそ道』につい
ては、作品中に俳句が含まれているので俳句教材として扱った。

※ 俳句教材以外の教材中に俳句や川柳が載っている場合も、一応取
り上げた。

なお、俳句の指導は短歌の指導とも関わりとあるところがあるので本来なら短歌も同時に取り上げるべきであるが、俳句と短歌を併せると相当量に達するので、短歌に関しては次回に回すこととした。

東京書籍

平成十八年度版教科書

『新編 新しい国語2』

1 言葉のひびきを味わおう

創作講座 ● 「句を付けて遊ぼう」(一六頁〜一七頁)の「①前句付けをしよう」に、次の前句付けの例と前句三句を収載する。

障子に穴をあけるいたづら

這へば立て立てば走れと親ごころ

● ほとぼり冷めるまで雲隠れ

● ガサガサガサリゴソゴソゴソリ

● ひざを抱えて空を見ている

「②発句に脇を付けよう」の発句に、一茶の次の句を取り上げている。

瘦蛙まけるな一茶是に有り

「③連句遊びをしよう」に、次の六句を収載する。

古池や蛙飛びこむ水の音

芭蕉

静まりかえる裏山の木々

林

黒板を見て時計やるせなし

山野

期末テストの最終科目

市川

星の名をアンドロメダとつぶやいて

矢田

友と見ている空駆ける夢

高橋

『新編 新しい国語3』

1 言語感覚をみがこう

「俳句を味わう」(一〇頁〜一二頁)に、以下の五句を収載する。

春風や闘志いだきて丘に立つ

高浜虚子

滝落ちて群青世界とどろけり

水原秋桜子

をりとりてはらりとおもきすすきかな

飯田蛇笏

いくたびも雪の深さを尋ねけり 正岡子規
分け入つても分け入つても青い山 種田山頭火

「句会を開こう」(句会の流れを解説し実作を勧めた文章)(一六頁〜一七頁)中に、次の十句を収載する。

ところてん父の大きなのど仏

万緑やシグナルは青会いに行く

木に木目石に紋様てんとう虫

水まいて届く限りの草ぬらす

ねぎぼうずみどり宇宙に立たんとす

堂々と親を離れずこいのぼり

カメの目のとろりと重し藤の花

台風や大切な傘守り抜く

緑陰やどこにもいないはずの人

みみず踏んで不機嫌になる女の子

1〜7の各単元の扉に、以下に示す十四句を収載する。

1 菜の花や月は東に日は西に 与謝蕪村

野の虹と春田の虹と空に合ふ 水原秋桜子

2 玫瑰や今も沖には未来あり 中村草田男

青蛙おのれもペンキぬりたてか 芥川龍之介

3 かたつむり甲斐も信濃も雨のなか 飯田龍太

ゆるやかに着てひとと逢ふ螢の夜 桂 信子

4 名月を取つてくれろとなく子哉

小林一茶

鳥わたるこきこきと鐘切れば

秋本不死男

5 柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺

正岡子規

鯛雲人に告ぐべきことならず

加藤楸邨

6 咳の子のなぞなぞ遊びきりもなや

中村汀女

水枕ガバリと寒い海がある

西東三鬼

7 手毬唄かなしきことをうつくしく

高浜虚子

梅一輪一輪ほどの暖かさ

服部嵐雪

2 古典を味わおう

「おくのほそ道」(八六頁〜九三頁)の解説文及び本文中に、以下の五句を収載する。

古池や蛙飛びこむ水のおと

草の戸も住み替はる代ぞ雛の家

夏草や兵どもが夢の跡

卯の花に兼房みゆる白毛かな

曾良

五月雨の降りのこしてや光堂

伊能忠敬が作成した地図(八七頁)に、「おくのほそ道」の旅中で詠まれた次の六句を収載する。

あらたふと青葉若葉の日の光

日光(栃木)

田一枚植ゑて立ち去る柳かな

蘆野(栃木)

閑かさや岩にしみ入る蟬の声

立石寺(山形)

五月雨をあつめて早し最上川

最上川(山形)

荒海や佐渡によこたふ天の河

越後路(新潟)

石山の石より白し秋の風

那谷寺(石川)

6 自分の感想を深めよう

文章講座 ● 「発想を変えよう③川柳を作る」(二四八頁〜二四九頁)

に、古川柳一句と生徒作品三句を収載する。

その後はこはごは翁竹を割り

竹の中いつから待ってかぐや姫

ある兵士隠れて不死の薬飲む

かぐや姫月ではやっぱりウサギ小屋

資料編

「季語の効果 鷹羽狩行」(一九六頁〜一九八頁)に、季語に関する一般的な解説と次の六句の季語の解説を収載する。

春昼の指とどまれば琴も止む

野澤節子

外にも出よ触るるばかりに春の月

中村汀女

万緑の中や吾子の齒生え初むる

中村草田男

牡丹散りて打ちかさなりぬ二三片

蕪村

子にみやげなき秋の夜の肩ぐるま

能村登四郎

極寒のちりもとどめず巖ふすま

飯田蛇笏

続けて、「季語一覧」(一九九頁)と題し、「新年」「春」「夏」「秋」「冬」

の各季語を「時候」「天文・地理」「生活・行事」「動物」「植物」の五項目に分けて収載する。

平成十四年度版教科書

『新編 新しい国語3』

1 言語感覚をみがこう

「俳句を味わう」(一二頁～一四頁)に、以下の五句を収載する。

春風や鬨志いだきて丘に立つ

高浜虚子

滝落ちて群青世界とどろけり

水原秋桜子

をりとりてはらりとおもきすすきかな

飯田蛇笏

いくたびも雪の深さを尋ねけり

正岡子規

分け入っても分け入っても青い山

種田山頭火

1～7の各単元の扉もしくは単元中に、以下の十一句を収載する。

1 菜の花や月は東に日は西に

与謝蕪村

2 赤い椿白い椿と落ちにけり

河東碧梧桐

かたつむり甲斐も信濃も雨のなか

飯田龍太

万緑の中や吾子の齒生え初むる

中村草田男

3 ひつばれる糸まつすぐや甲虫

高野素十

4 名月を取つてくれろとなく子かな

小林一茶

しづかなる力満ちゆき蟬蛸とぶ

加藤楸邨

5 柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺

正岡子規

海に出て木枯帰るところなし

山口誓子

6 咳の子のなぞなぞあそびきりもなや

中村汀女

7 梅一輪一輪ほどの暖かさ

服部嵐雪

5 古典を味わおう

『おくのほそ道』(一二三頁～一三九頁)に、本文と共に次の三句を収載する。

草の戸も住み替はる代ぞ雛の家

夏草や兵どもが夢の跡

卯の花に兼房みゆる白毛かな

『おくのほそ道』旅程図(一二三頁～一三三頁)に次の三句を収載する。

閑かさや岩にしみ入る蟬の声

五月雨をあつめて早し最上川

荒海や佐渡によこたふ天の河

平成九年度版教科書

『新編 新しい国語2』

4 文学に親しむ

「文法の窓 2 助詞の機能／文の組み立て」(一五七頁～一五九頁)に、次の句の添削エピソードを収載する。

米洗う前に蛍の二つ三つ(添削前)

米洗う前を蛍の二つ三つ(添削後)

『新編 新しい国語3』

3 感性をみがく

「俳句を味わう 飯田龍太」(四八頁〜五一頁)に、以下の四句を収載する。

卒業の兄と来てゐる堤かな	芝不器男
少年の見遣るは少女鳥雲に	中村草田男
初風の岩より舟に乗れと云ふ	川端茅舎
元日や手を洗ひをる夕ごろ	芥川龍之介

「現代の俳句 (『新しい国語』編集委員会選)」(五二頁〜五三頁)

に、以下の九句を収載する。	
春風や闘志いだきて丘に立つ	高浜虚子
長き長き春暁の貨車なつかしき	加藤楸邨
滝落ちて群青世界とどろけり	水原秋桜子
かたつむり甲斐も信濃も雨のなか	飯田龍太
天の川海の南へ流れけり	正岡子規
大寺の月の柱の影に入る	野澤節子
咳の子のなぞなぞあそびきりもなや	中村汀女
百万の焼けて年逝く小名木川	石田波郷
分け入つても分け入つても青い山	種田山頭火

4 古典を味わう

「漂泊の思ひ」(二二八頁〜一三六頁)に解説文と本文他を収載する

が、その中に以下の五句を収載する。

草の戸も住み替はる代ぞ雛の家	
行く春や鳥啼き魚の目は泪	
夏草や兵どもが夢の跡	
卯の花に兼房みゆる白毛かな	曾良
五月雨の降りのこしてや光堂	

平成五年度版教科書

『新しい国語1』

5 古典に親しむ

「七草の歌 久保田淳」(二七八頁〜一八三頁)に、芭蕉の以下の二句を収載する。

しら露もこぼさぬ萩のうねりかな
よくみればなづな花さく垣根かな

『新しい国語3』

6 感性をみがく

「俳句を味わう 飯田龍太」(三八頁〜四一頁)に、以下の四句を収載する。

卒業の兄と来てゐる堤かな	芝不器男
少年の見遣るは少女鳥雲に	中村草田男
初風の岩より舟に乗れと云ふ	川端茅舎
元日や手を洗ひをる夕ごろ	芥川龍之介

「現代の俳句 (飯田龍太選)」(四二頁〜四五頁)に、以下の八句を収載する。

春雨やみなまたたける水たまり 木下夕爾

立春の海よりの風海見えす 桂 信子

友来たるもつとも暑き夕べかな 永田耕友

富士を去る日焼けし腕の時計澄み 金子兜太

稲雀散つてかたまる海の上 森 澄雄

少年が跳ねては減らす無花果よ 高柳重信

はじめての雪闇に降り闇にやむ 野澤節子

この山の鳥居の立てる冬田かな 三橋敏雄

7 古典を味わう

「漂泊の思ひ 『おくのほそ道』より」(一三六頁〜一四四頁)に、

解説文や本文などと以下の五句を収載する。

草の戸も住み替はる代ぞ雛の家

行く春や鳥啼き魚の目は泪

夏草や兵どもが夢の跡

卯の花に兼房みゆる白毛かな 曾良

五月雨の降りのこしてや光堂

平成二年度版教科書

『新しい国語1』

8 古典にふれる

「七草の歌 久保田淳」(二六二頁〜一六七頁)に、芭蕉の以下の二句を収載する。

しら露もこぼさぬ萩のうねりかな

よくみればなづな花さく垣根かな

『新しい国語3』

2 感性をみがく「俳句を味わう」

(1)「丘に立つ」(二六頁〜二八頁)に、以下の四句の鑑賞文を収載する。

春風や闘志いだきて丘に立つ 高浜虚子

みどりゆらゆらゆらめきて動く曉 荻原井泉水

一連の露りんりと糸芒 川端茅舎

落葉踏む今日の明るさ明日もあれ 水原秋桜子

(2)「現代の俳句」(二九頁)に、以下の八句を収載する。

ゆさゆさと大枝ゆるる桜かな 村上鬼城

春園のホースむくむく水通る 西東三鬼

蛭獲て少年の指みどりなり 山口誓子

万緑の中や吾子の齒生え初むる 中村草田男

をりとりてはらりとおもきすすきかな

あはれ子の夜寒の床の引けば寄る 飯田蛇笏

中村汀女

いくたびも雪の深さを尋ねけり
冬の浅間は胸を張れよと父のごと
正岡子規
加藤楸邨

9 古典に学ぶ

「漂泊の思ひ（奥の細道）」（二六八頁〜二七五頁）に、解説文や本文などと共に以下の五句を収載する。
旅に病んで夢は枯れ野をかけめぐる
草の戸も住み替はる代ぞ雛の家
行く春や鳥啼き魚の目は泪
夏草や兵どもが夢の跡
卯の花に兼房みゆる白毛かな
曾良

光村図書

平成十八年度版教科書

『国語3』

2 社会をとらえる

豊かな言葉 「俳句の可能性 宇多喜代子」（五八頁〜六三頁）と題する文章中に、以下の五句とその後「歳時記」（六三頁）の簡単な解説文を収載する。

どの子にも涼しく風の吹く日かな
せつせつと眼まで濡らして髪洗ふ
虫の夜の星空に浮く地球かな
飯田龍太
野澤節子
大峯あきら

咳をしても一人
尾崎放哉
灰色の象のかたちを見にゆかん
津沢マサ子

4 古典を楽しむ

「夏草―『おくのほそ道』から― 松尾芭蕉」（二二六頁〜二三三頁）の本文中に、以下の四句を収載する。
夏草や兵どもが夢の跡
卯の花に兼房見ゆる白毛かな
五月雨の降りのこしてや光堂
曾良

『おくのほそ道』俳句地図」（二二八頁）に、前掲の「草の戸も」「夏草や」「卯の花に」「五月雨の」の四句以外に以下の六句を収載する。
野を横に馬牽むけよほととぎす
閑かさや岩にしみ入る蟬の声
五月雨をあつめて早し最上川
荒海や佐渡によこたふ天河
むざんやな甲の下のきりぎりす
蛤のふたみにわかれ行く秋ぞ

なお、『おくのほそ道』の後に江戸時代の俳諧について簡単に解説した「俳句と俳諧」（一三三頁）を収載する。

学習を広げる

「資料」に「俳句十六句」(二一八頁〜二一九頁)として、近世の俳句四句と近代以降の俳句十二句を収載する。

◆近世の俳句

梅一輪一論ほどの暖かさ 服部風雪

夏河を越すうれしさよ手に草履 与謝蕪村

稲妻にへなへな橋を渡りけり 小林一茶

木枯の果はありけり海の音 池西言水

◆近代以降の俳句

赤い椿白い椿と落ちにけり 河東碧梧桐

ちるさくら海あをければ海へちる 高屋窓秋

人体冷えて東北白い花盛り 金子兜太

六月を奇麗な風の吹くことよ 正岡子規

あるけばかつこういそげばかつこう 種田山頭火

山越える山のかたちの夏帽子 桂信子

月幾世照らせし鴟尾に今日の月 水原秋櫻子

くろがねの秋の風鈴鳴りにけり 飯田蛇笏

まだ夢はあるか きつつき木を覗く 鎌倉佐弓

流れ行く大根の葉の早さかな 高浜虚子

咳をする母を見上げてゐる子かな 中村汀女

木の葉ふりやまざいそぐないそぐなよ 加藤楸邨

平成十四年度版教科書

『国語2』

一 春を伝える

「春を見つけよう」(二二頁〜二七頁)に、種田山頭火の以下の二句を収載する。

さくらさくらさくさくさくらちるさくら 山頭火

「春を届けよう―編集会議を開く」(二六頁〜三一頁)に、以下の二句を収載する。

チューリップ喜びだけを持つてゐる 細見綾子

春風や闘志いだきて丘に立つ 高浜虚子

二 世界に目を向ける

「短歌と俳句、それぞれの表現 高田宏」(一〇一頁〜一〇九頁)

に、江戸時代の句七句と近代以降の俳句七句を収載する。

荒海や佐渡によこたふ天河 松尾芭蕉

閑さや岩にしみ入蟬の声 松尾芭蕉

ながながと川一筋や雪の原 野沢凡兆

春の海終日のたりのたり哉 与謝蕪村

四五人に月落かかるをどり哉 与謝蕪村

月の夜や石に出て鳴くきりぎりす 千代女

ゆうぜんとして山を見る蛙哉 小林一茶

遠山に日の当りたる枯野かな 高浜虚子

高浜虚子

朝湯こんこんあふるるまんなかのわたくし 種田山頭火
ゆきふるといひしばかりの人しづか 室生犀屋
外にも出よ触るるばかりに春の月 中村汀女
水枕ガバリと寒い冬がある 西東三鬼
海に出て木枯帰るところなし 山口誓子
檻の鷺さびしくなれば羽搏つかも 石田波郷

『国語3』

二 古典を味わう

「夏草―『おくのほそ道』から― 松尾芭蕉」(五〇頁〜五五頁)
の本文中に、以下の三句を収載する。

草の戸も住み替はる代ぞ雛の家

夏草や兵どもが夢の跡

卯の花に兼房見ゆる白毛かな 曾良

四 状況に生きる

「漢字の学習5」総まとめ」(二二二頁〜二二七頁)に、国字の例として「凧」の漢字を用いた漱石の次の句を収載する。
凧や梅に夕日を吹き落す 夏目漱石

平成九年度版教科書

『国語3』

二 表現の味わい

「俳句への招き 上田五千石」(四八頁〜五五頁)に、以下の五句の鑑賞文と十一句を収載する。

ちるさくら海あをければ海へちる 高屋窓秋
白牡丹といふといへども紅ほのか 高浜虚子
葡萄食ふ一語一語の如くにて 中村草田男
とどまればあたりふゆる蜻蛉かな 中村汀女
雪国やはつはつはつ時計生き 森澄雄

囀をこぼさじと抱く大樹かな

美しき春潮の航一時間

あをあをと空を残して蝶分れ

雀らも海かけて飛べ吹流し

一点の偽りもなく青田あり

をりとりてはらりとおもきすすきかな

いなびかり北よりすれば北を見る

鳥わたるこきこきと缶切れば

降る雪が父子に言を齎しぬ

冬菊のまとふはおのがひかりのみ

分け入つても分け入つても青い山

六 古典を味わう

「夏草―『おくのほそ道』から― 松尾芭蕉」(二〇二頁〜二〇八頁)の本文中に、以下の四句を収載する。

星野立子

高野素十

大野林火

石田波郷

山口誓子

飯田蛇笏

橋本多佳子

秋本不死男

加藤楸邨

水原秋桜子

種田山頭火

草の戸も住み替はる代ぞ雛の家

夏草や兵どもが夢の跡

卯の花に兼房見ゆる白毛かな

五月雨の降りのこしてや光堂

曾良

平成五年度版教科書

『国語3』

二 表現の味わい

「俳句への招き 上田五千石」(六四頁〜七一頁)に、以下の五句の鑑賞文と十一句を収載する。

ちるさくら海あをければ海へちる

白牡丹といふといへども紅ほのか

葡萄食ふ一語一語の如くにて

とどまればあたりにふゆる蜻蛉かな

雪国やはつはつはつはつ時計生き

高屋窓秋

高浜虚子

中村草田男

中村汀女

森澄雄

唄をこぼさじと抱く大樹かな

美しき春潮の航一時間

あをあをと空を残して蝶分れ

雀らも海かけて飛べ吹流し

一点の偽りもなく青田あり

をりとりてはらりとおもきすすきかな

いなびかり北よりすれば北を見る

星野立子

高野素十

大野林火

石田波郷

山口誓子

飯田蛇笏

橋本多佳子

鳥わたるこきこきと缶切れば

降る雪が父子に言を齎しぬ

冬菊のまとふはおのがひかりのみ

分け入つても分け入つても青い山

秋本不死男

加藤楸邨

水原秋桜子

種田山頭火

六 古典を味わう

「夏草——「おくのほそ道」から—— 松尾芭蕉」(二〇四頁〜二

一〇頁)の本文中に、以下の四句を収載する。

草の戸も住み替はる代ぞ雛の家

夏草や兵どもが夢の跡

卯の花に兼房見ゆる白毛かな

五月雨の降りのこしてや光堂

曾良

平成二年度版教科書

『国語3』

三 見つめる心

「俳句——世界で最も短い詩 鷹羽狩行」(七八頁〜八五頁)に以下の五句の鑑賞文と俳句の簡単な解説、その後七句を収載する。

眼にあてて海が透くなり桜貝

ひつばれる糸まつすぐや甲虫

啄木鳥や落葉をいそぐ牧の木々

海に出て木枯帰るところなし

大空に羽子の白妙とどまれり

松本たかし

高野素十

水原秋桜子

山口誓子

高浜虚子

あをあと空を残して蝶分れ

大野林火

雀らも海かけて飛べ吹流し

石田波郷

万緑の中や吾子の齒生え初むる

中村草田男

しづかなる力満ちゆき蟻蛸とぶ

加藤楸邨

金剛の露ひとつぶや石の上

川端茅舎

冬蜂の死にどころなく歩きけり

村上鬼城

咳の子のなぞなぞ遊びきりもなや

中村汀女

六 古典を味わう

「夏草——『おくのほそ道』から 松尾芭蕉」(一九七頁〜二〇三頁)の本文中に、以下の四句を収載する。

草の戸も住み替はる代ぞ雛の家

夏草や兵どもが夢の跡

卯の花に兼房見ゆる白毛かな

五月雨の降りのこしてや光堂

曾良

三省堂

平成十八年度版教科書

『現代の国語3』

「俳句の世界」(八頁〜一二頁)に、俳句の簡単な解説や鑑賞と共に以下の六句と近代以降の俳句を十一句収載する。

餅して山ほととぎすほしいまま

杉田久女

桐一葉日当りながら落ちにけり

高浜虚子

まさなる空よりしだれざくらかな

富安風生

董ほどな小さき人に生れたし

夏目漱石

歩きつづける彼岸花咲きつづける

種田山頭火

一軒家も過ぎ落ち葉する風のままに行く

河東碧梧桐

菜の花がしあはせさうに黄色して

細見綾子

バスを待ち大路の春をうたがはず

石田波郷

万緑の中や吾子の齒生え初むる

中村草田男

じゃんけんで負けて蛸に生まれたの

池田澄子

芋の露連山影を正しうす

飯田蛇笏

星空へ店より林檎あふれをり

橋本多佳子

いくたびも雪の深さを尋ねけり

正岡子規

咳の子のなぞなぞあそびきりもなや

中村汀女

鮫鱈の骨まで凍ててぶちきらる

加藤楸邨

入れものが無い両手で受ける

尾崎放哉

湾曲し火傷し爆心地のマラソン

金子兜太

『おくのほそ道 松尾芭蕉』(五六頁〜六一頁)に、本文と共に以下の四句を収載する。

草の戸も住み替はる代ぞひなの家

夏草やつはものどもが夢の跡

卯の花に兼房見ゆるしらがかな

五月雨の降り残してや光堂

『おくのほそ道』行程図〔六〇頁〕に、以下の五句を掲出する。

行く春や鳥啼き魚の目は泪

閑かさや岩にしみ入る蟬の声

さみだれをあつめて早し最上川

荒海や佐渡によこたふ天の河

蛤のふたみにわかれ行く秋ぞ

「江戸時代の俳諧」〔六一頁〕と題したコラムに、蕪村と一茶の句を

二句ずつ掲出する。

菜の花や月は東に日は西に

蕪村

さみだれや大河を前に家二軒

蕪村

雪とけて村一ぱいの子どもかな

一茶

これがまあついの栖か雪五尺

一茶

平成十四年度版教科書

『現代の国語3』

1 こころをつなぐ

「俳句の世界」(一〇頁〜一七頁)に、俳句の簡単な解説や次の四句の鑑賞文、近代以降の俳句十一句を収載する。

笥して山ほととぎすほしいまま

杉田久女

春風や鬨志いだきて丘に立つ

高浜虚子

うしろすがたのしぐれてゆくか

種田山頭火

曳かれる牛が辻ですつと見廻した秋空だ

河東碧梧桐

菜の花がしあはせさうに黄色して

細見綾子

バスを待ち大路の春をうたがはず

石田波郷

万緑の中や吾子の齒生え初むる

中村草田男

じゃんけんで負けて蛭に生まれたの

池田澄子

芋の露連山影を正しうす

飯田蛇笏

星空へ店より林檎あふれをり

橋本多佳子

いくたびも雪の深さを尋ねけり

正岡子規

咳の子のなぞなぞあそびきりもなや

中村汀女

鮫鱗の骨まで凍ててぶちきらる

加藤楸邨

歩きつづける彼岸花咲きつづける

種田山頭火

湾曲し火傷し爆心地のマラソン

金子兜太

「表現プラザ1 わたしの歳時記」(一八頁〜一九頁)に、俳句歳時

記の簡単な解説を収載する。

5 古典を楽しむ

「おくのほそ道 松尾芭蕉」(一一〇頁〜一二六頁)に、本文と共に以下の四句を収載する。

草の戸も住み替はる代ぞひなの家

夏草やつはものどもが夢の跡

卯の花に兼房見ゆるしらがかな
五月雨の降り残してや光堂
曾良

『おくのほそ道』行程図「や写真（一一五頁）」と共に、以下の三句を掲出する。

閑かさや岩にしみ入る蝉の声
さみだれをあつめて早し最上川
荒海や佐渡によこたふ天の河

平成九年度版教科書

『現代の国語3』

3 感動の表現

「俳句とその世界」（六七頁〜七三頁）に、俳句の簡単な解説と次の二句の鑑賞文、近代以降の俳句十句を収載する。

春風や鬨志いだきて丘に立つ
卒業証書を握り汗ばみて我に向かひ立ち
高浜虚子
河東碧梧桐

バスを待ち大路の春をうたがはず
菜の花がしあはせさうに黄色して
万緑の中や吾子の齒生え初むる
サクランボの木の下のあのカクレンボ
芋の露連山影を正しうす
かりかりと蟻螂蜂の白を食む
石田波郷
細見綾子
中村草田男
高柳重信
飯田蛇笏
山口誓子

咳の子のなぞなぞあそびきりもなや

中村汀女

鮫鱗の骨まで凍ててぶちきらる

加藤楸邨

昼寝さめてどちらを見ても山

種田山頭火

湾曲し火傷し爆心地のマラソン

金子兜太

【表現プラザ】「わたしの歳時記」（八六頁〜八七頁）に、俳句歳時記の簡単な解説を収載する。

4 古典の心

「旅の心」（一三二頁〜一四〇頁）「月日は——おくのほそ道」に、本文と共に以下の三句を収載する。

草の戸も住み替はる代ぞひなの家
夏草やつはものどもが夢の跡
卯の花に兼房見ゆるしらがかな
曾良

平成五年度版教科書

『現代の国語3』

2 人類の課題

「表現プラザ」「私説歳時記」（五二頁）に、俳句歳時記の簡単な解説を収載する。

3 感動の表現

「俳句とその世界」（七九頁〜八六頁）に、俳句の簡単な解説と次の

二句の鑑賞文、近代以降の俳句十句を収載する。

桐一葉日当りながら落ちにけり

高浜虚子

赤い椿白い椿と落ちにけり

河東碧梧桐

島々に灯をともしけり春の海

正岡子規

バスを待ち大路の春をうたがはず

石田波郷

万緑の中や吾子の齒生え初むる

中村草田男

麦秋の中なるが悲し聖廢墟

水原秋桜子

芋の露連山影を正しうす

飯田蛇笏

かりかりと蟻螂蜂の貞を食む

山口誓子

歩きつづける彼岸花咲きつづける

種田山頭火

咳の子のなぞなぞあそびきりもなや

中村汀女

鮫鱈の骨まで凍ててぶちきらる

加藤楸邨

白葱のひかりの棒をいま刻む

黒田杏子

4 古典の心

『旅の心』(二三三頁〜一四〇頁)「月日は——奥の細道」に、本文と

共に以下の三句を収載する。

草の戸も住み替はる代ぞひなの家

夏草やつはものどもが夢の跡

卯の花に兼房見ゆるしらがかな

曾良

『現代の国語 新訂版1』

4 古典にふれる

「江戸の人々の暮らしと心」(一二二頁〜一二九頁)に、川柳の簡単な解説と以下の古川柳五句を収載する。

浪人は長いものから食ひはじめ

武蔵坊とかく支度に手間がとれ

本降りになつて出て行く雨宿り

泣き泣きもよいほうを取る形見分け

これ小判たつたひと晩めてくれる

『学習のために』(一二八頁)に、次の古川柳三句を掲出する。

寝てゐてもうちわの動く親心

逃げしなに覚えてゐろは負けたやつ

まよひ子の親はしやがれて礼を言ひ

『現代の国語 新訂版3』

3 感性を豊かに

「島々に——俳句十句」(六四頁〜六六頁)に近代の俳句十句を収載する。

島々に灯をともしけり春の海

正岡子規

バスを待ち大路の春をうたがはず

石田波郷

金龜子擲つ闇の深さかな

高浜虚子

万緑の中や吾子の齒生え初むる

中村草田男

麦秋の中なるが悲し聖廢墟

水原秋桜子

芋の露連山影を正しうす

飯田蛇笏

かりかりと蟪蛄蜂の貝を食む

山口誓子

歩きつづける彼岸花咲きつづける

種田山頭火

咳の子のなぞなぞあそびきりもなや

中村汀女

鮫鱧の骨まで凍ててぶちきらる

加藤楸邨

4 古人の心

「旅の心」(一二三頁～一三三頁)「月日は——奥の細道」に、本文と共に以下の三句を収載する。

草の戸も住み替はる代ぞひなの家

夏草やつはものどもが夢の跡

卯の花に兼房見ゆるしらがかな

曾良

「付録」「俳句の表現技法」(二頁)に、「季語」「切れ字」「句切れ」

などに関する解説と次の六句を例句として掲出する。

校塔に鳩多き日や卒業す(春)

中村草田男

明き星傾く空や時鳥(夏)

河東碧梧桐

桐一葉日当りながら落ちにけり(秋)

高浜虚子

小春日や石を噛み居る赤蜻蛉(冬)

村上鬼城

咳をしてもひとり

尾崎放哉

おとはしぐれか

種田山頭火

三 おわりに

最初に述べたように、本稿は紙幅の都合で「平成以降の中学国語教科書における俳句教材について(1)」に取り上げることができなかった東京書籍、光村図書、三省堂の各国語教科書に収載された俳句関連の教材を出版社別、年代順に網羅したものである。学校図書と教育出版社の国語教科書について取り上げた(1)と併せ見ると、平成二年度以降の国語教科書に載る俳句関連の教材を一覧することができただけだが、このように全てを列挙してみると、出版社によって扱い方かなりの違いがあることがよく分かる。

日本で生まれた俳句が海外で熱い注目を浴び、様々な言語によるハイクを誕生させていることは周知の事実である。しかし、そうした一方で、俳句が日本の中学生にとって魅力的な教材とは言えない状況が久しく続いていることも、これまた周知の事実である。自然や季節と向き合う機会が減っている今の生徒に対し、どのような俳句教材をどのような形で与えれば、生徒は俳句教材に興味関心を抱き楽しく学習できるのであるか。また、俳句と同詩型の川柳は今のようないいのであるか。中学国語教科書における俳句教材の指導については考察すべき問題が少なくないが、既に紙幅も尽きているため、そうした諸問題については次稿で考察することにした。